

【山梨県教育委員会教育長賞】

心の壁を超えた先へ

昭和町立押原中学校

三年 黒木 瑞希

私は一時期、アメリカに在住していたことがある。私が住んでいた都市には様々な人種の人々がいた。肌や目の色、顔立ち、出身地や言語など皆それぞれ違っていた。日本では多少の個人差はあるものの、ほとんどの人が同じような肌や髪の色をしていて日本語を話す。日本を出たことがなかった私にとって、町行く人々がそれぞれ全く違うという光景は非常になじみのないことだった。私の住んでいた家は2つの地区の境目に建っていて、片方の地区は裕福な人が多く住んでいたが、もう一方は比較的そうでない人が多かった。その地区は治安が悪く、人が言い合いになっている声が毎晩聞こえてきていた。知らない人にお金をめぐんでほしいと声をかけられたりもした。そこに住んでいた多くの人々がアフリカ系アメリカ人だったことから、私はいつのまにか暗い肌色の人に怖そう、と勝手な「イメージ」を抱くようになっていった。

とある帰り道、新しい現地の小学校に慣れていなかった私が親と一緒に下校していたときのことである。横断歩道で信号待ちをしていると、反対側で五、六人ほどの若者が同じく信号が変わるのを待っていた。信号が青になり歩き出すと、ちょうどその人達とすれ違った。すると、彼らは急に笑い出し、私達親子のことを指差しながら

「Chinese!Chinese!」

と大声で叫んだ。中国語のマネをしてきたりもした。ほぼ全く英語が分からなかった私だが、その言葉と、馬鹿にされている、ということは分かった。そうやって見た目だけで判断されたことが私にとってとても悲しかった。自分がアジア人であることがみじめで恥ずかしいことのようにも思えた。その時私は、はっとした。私がしていたことは、今彼らが私にしたことと同じなのではないだろうか。私は暗い肌の色をしている人達、と見た目ですくくりにしてしまってい

たのだ。私が抱いていた「イメージ」というものは、単なる「偏見」にすぎなかったのである。私は意識せずに、いつのまにか、「差別」してしまっていたのだ。そんな自分が私は怖くなってしまった。学校でも親からも、差別はいけないと習っていたはずだった。そして、とっくに理解しているつもりでいた。しかし私の考えは人種差別そのものだった。私は自分のことをなぐりたい気持ちでいっぱいになった。

その出来事からしばらくして小学校を卒業し、中学校に進学した。日本よりも小学校の年数が短いのである。私の入学した中学校はとても大きいところだったので、私はますます多くの人と関わるようになった。友達や仲の良い先生もできて、その中にはもちろん暗い肌の色をしている人もいた。その人達に優しくされる度に、私の心は痛んだ。私はそんな親切な人にまで自ら壁をつくってしまっていたのだ。「差別」と「偏見」でつくられた壁である。人は皆、よく知らないものを怖がり、誤った先入観を抱いてしまう生き物である。しかし、「知らなかった」や「知っているつもりだった」は本当に、差別して良い理由になるのだろうか。

世界には差別によって苦しめられ、辛い思いをしている人がたくさんいる。ときには心無い言葉でののしられ、傷つけられる。あるときは、理不尽に命を奪われたりもする。このような悲劇が起こってしまうのはきっと、差別と偏見が心の中に壁をつくっているからだろう。日本にずっと住んでいると人種差別はあまり身近に感じられないかもしれないが、人種以外にもあらゆることで差別は起こっている。それに、自分にあまり関わりがないからといって、決してそれが起こっていないわけではないのだ。差別と偏見の壁を取り除くためには、「知らない」ことに対して恐怖心や差別心を抱くのではなく、「知ってみよう」とする姿勢が必要なのだ。

これからきっと、さらに多くの人々が国境を超えて関わっていく時代になっていくと思う。だから、皆で差別と偏見の壁を壊していこう。きっとその先に、世界中の人々が互いを認め合うことのできる、平和で幸せにあふれた世界が待っているはずだから。